

大学院生の研究

博士後期課程 3 年次 大野 普希

私は、後 2 世紀に執筆されたパウサニアスの『ギリシア案内記』という作品を中心に、ローマ帝国支配下（特に後 1-3 世紀）のギリシア人の歴史認識、空間認識について研究しています。パウサニアスについては以前にも本誌で紹介させていただいたので、今回は、昨年 10 月から留学しているイタリアのピサ高等師範学校での生活を語ることで研究紹介に代えさせていただきます。こちらで受け入れ教員となってくださっているのは、古代末期の哲学的著作の写本研究の第一人者である Concetta Luca 先生という方です。古代の史料を読む中で、校訂テキストのみに頼るのではなく自分でも写本の読解や校訂に取り組んでみたいと考え、そのノウハウを学ぶためにピサへの留学を決めました。

先生のゼミでは、一年を通して、プロクロスの『ティマイオス注解』という作品を分析しています。個々の写本の字体の分析や、写本間の異同の分析による系統樹の復元、さらには校訂テキストの作り方など、写本学の基礎的な方法論を網羅的かつ実践的に学ぶことができるので、毎回多くの収穫があり充実した日々を送っています。一方で、自分の不甲斐なさに落胆することもしばしばです。私の場合、写本とにらめっこしながら一単語一単語を解説することで精一杯なのですが、こちらの学生たちは、学部生のうちから、写本を読みつつその場でイタリア語に翻訳したり、字体の特徴からその年代を推測したりといった、今の私には複雑に思える作業を事もなげにこなしています。

写本学の知見を自分の研究に直接生かせるようになるまでには、まだまだ多くの訓練が必要ですが、それでも、普段利用している校訂テキストの背後に広がる写本伝承の世界が、以前よりは身近なものに感じられるようになってきました。折り返し地点を過ぎた留學生活をより一層有意義なものにできるよう、今後も勉強に励みたいと思います。

博士後期課程 3 年次 岡本 幹生

帝政初期のローマにおいて、アウグストゥスの記憶がいかに形成されたのかについて研究しています。なぜ私はアウグストゥスに関心をもったのかとふと思うことがあり、ここ 1、2 年、何度か関心を持った経緯について思い返してみる機会がありましたので、ここで少しまとめてみたいと思います。

結論からいうと、その原点はエジプトということになります。私はもともと古代エジプトに興味

があり、そこから古代史に関心を持ちました。そんなエジプトが好きな私には、どうにも好きになれない人物がいました。それはアウグストゥスです。カエサルやアントニウスといったローマの政治家がエジプトと協力するという姿勢をとったのに対し、アウグストゥスは、エジプトを戦争で破り、ローマの属州にし、エジプトを滅ぼすという選択をした張本人だったからです。そのため、アウグストゥスに対して勝手に敵対心を持っていました。そうしたなか、あるとき、エジプトが斜陽の時期であったとはいえ、なぜアウグストゥスは、過去にあれだけ栄えたエジプトを滅ぼすことができたのだろうかと思い、アウグストゥスに関する伝記や論文を読み、彼について調べてみることにしました。その結果、自己宣伝が巧みで、計算高いアウグストゥスの姿を知り、興味を持つようになったのです。好きの反対は嫌いではなく無関心だと言われますが、あながち間違いではないのかもしれません。

さて、そうしたエジプト学だけでなく、記憶研究でも大きな業績を残した、ヤン・アスマンの主著『文化的記憶』の邦訳が、昨年刊行されたことを踏まえ、当該書の記憶研究上の位置づけや、古代ローマ史研究における当該書の意義などについて、私なりに論じてみましたので、もしよろしければご一読いただけましたら幸いです（「古代ローマ史研究と記憶研究の進展—ヤン・アスマン『文化的記憶』の出版に寄せて—」『西洋古代史研究』24、2024 年、17-39 頁）。

博士後期課程 3 年次 神津 智史

私は、巡察制度がドイツ騎士修道会「国家」において果たした役割について、コミュニケーションの観点から研究しております。中世後期のラテン・カトリック圏において、ドイツ騎士修道会はバルト海沿岸地帯（主にプロイセン地方、リヴォニア地方）を中心とした膨大な所領群を管理・運営しておりました。

このドイツ騎士修道会「国家」において、巡察制度は、その一連のプロセスをとおして、中央と地方とをつなぐコミュニケーション回路としての役目を担いました。巡察使に任命され、巡察対象地に指定された地方や管区へと派遣された使節たちは、現地に到着した後、多岐にわたる調査事項について、提出された文書の内容についての確認、関係者への聞き込み調査といった、様々なコミュニケーション手法を組み合わせつつ、念入りに調査を行い、多くの情報を収集しておりました。

また、巡察使が派遣されるのは、プロイセン地方内のみに限らず、必要に応じて、リヴォニア地方や、ドイツ地方など、その都度、巡察対象地が設定され、ドイツ騎士修道会「国家」の全域が調査対象になりました。

このように、巡察使による現地調査は、支配領域全体を対象範囲に含めつつ、中央と地方との間での様々なコミュニケーションを促進するものでもありました。

私は現在、巡察実施をめぐる展開されるコミュニケーションの問題について、特に関心を持ち日々研究を進めております。そして今後は、巡察使の活動にかんして、巡察対象地方ごとの巡察使の活動の特徴の解明、他類型の様々な使節の活動によってもたらされるコミュニケーション実践との比較検討に着手しつつ、ドイツ騎士修道会「国家」におけるコミュニケーションの問題に取り組んでいこうと考えております。

博士後期課程 3 年次 新田 さな子

近世ヨーロッパでは、他の時代・地域と同様に、統治者は成人男性が望ましいとされていました。しかし、世襲王政はたびたび非成人男性君主の即位に直面することになります。イングランドでは、15 世紀末から半世紀以上にわたって強権的な政治を行った成人男性君主が 2 代にわたって王国を統治したあと、16 世紀半ばに 9 歳の少年王エドワード 6 世が即位しました。彼の後はイングランド史上初の実効支配を行った女王が誕生し、彼女の次も女王だったため半世紀間の「非成人男性君主時代」が到来しました。

フェミニズムやジェンダーの観点から女王の治世に対する研究が進むなか、未成年男子君主への注目は不足しています。国王が未成年であることが実際に政治を動かす有力廷臣らにどのような影響を与えたのか、広くイングランド政治や外交においてどのような意味を持ったのか、エドワード自身の成長や彼を取り巻く状況の変化はこれらの点にいかに関与したのかに関心があります。

昨年 9 月末からはイギリスのリーズ大学に滞在しています。16 世紀イングランド史を専門とする受け入れ教員のもと、ロンドンを中心に史料調査を行ったり、近隣大学をはじめ、歴史学を研究する全国の大学院生が報告する PGR Seminar で報告したりしました。1 回につき 2 名が報告し、私と一緒に報告したヨーク大の学生は私と近い関心からロシアの女帝を取り扱っていたうえ、学部生のころは 16 世紀イングランド史が好きだったとのことで意気投合し、連絡先を交換しました。そこで報告した内容をもとに、受け入れ教員からの助言を受けつつ、現在英語で論文を執筆中です。また、物価高と円安を乗り切るべく、リーズ大学のカリキュラム改革プロジェクトのインターンも始めました。

国は違えどどの大学も抱えている課題や社会からの視線は似ているなど思うことも多いです。残りの滞在もできる限り多くのことを吸収できるよう努めます。

博士後期課程 3 年次 林 祐一郎

博士後期課程進学から四年。今や教わることもより教えることの方が増えています。一昨年前から北白川学園の「山の学校」でドイツ語を教えているのですが、昨年後期には大谷大学文学部で専門科目「西洋史文献を読む 2」を担当し、歴史学の専門的な知見を日常的に披露する機会を得ました。その知見は、以下二つの研究テーマを通じて得られたものでもあります。

一つ目が、第二帝政期におけるドイツ・ユグノー協会 (DHV) の成立とその初代会長アンリ・トラン (1833-1902) について。このテーマにかんしては昨年 5 月に口頭報告を行い (「ドイツ・ユグノー協会—第二帝政期における改革派諸教会との関係を中心に—」日本西洋史学会第 74 回大会、於東京外国語大学府中キャンパス、2024 年 5 月 19 日)、現在は雑誌論文を準備中です。

さて、一つ目のテーマは、何処かで日本とも繋がっていたようです。改革派信仰の復興に熱心だった牧師トランは、明治維新以降本格化したプロテスタントによる日本伝道についても知識を得ていました。その情報源となったイギリス系ドイツ人ヘルマン・ダルトン (1833-1913) は、トランと同世代の改革派牧師として主にロシアで伝道に従事していた人物でしたが、1894 年に来日し、普及福音新教伝道会 (のちの東アジア伝道会) というドイツ系の宣教団体の活動を観察していたのです。

同会の宣教師として京都で 30 年間も暮らしたエミール・シラー (1865-1945) の日本体験を考察するのが、筆者の二つ目の課題になります。このテーマにかんしても昨年 12 月に口頭報告を行い (「あるドイツ人宣教師の夢の跡—普及福音新教伝道会宣教師エミール・シラーの日本滞在と神道研究を巡って—」阪神ドイツ文学会第 245 回研究発表会、立命館大学大阪いばらきキャンパス、2024 年 12 月 1 日)、今年度中に英語論文を投稿予定です。

博士後期課程 2 年次 坂野 水咲

アウグスティヌスのテキストを中心に、4-5 世紀北アフリカのキリスト教共同体における会食について研究しています。昨年の読書会大会ではアウグスティヌスが 408 年に文章化した説教『断食の効用について』に注目し、集団での断食を行う四旬節の期間に彼が信徒たちの感覚 (痛み) への言葉によるアプローチを通じて、彼らを「貧者への憐れみ」を共有する、よりキリスト教徒らしい「感覚の共同体」へと導くことを意図していたと報告しま

した。そしてヒッポから離れた地に住む司教や裕福な信徒に送った「共感共苦」を説く書簡から、四旬節の断食を通じて北アフリカの信仰共同体の中で、アウグスティヌスの言葉を軸として階級を超越した想像上の食卓の共有が行われていたという新たな解釈の提示を試み、四旬節を古代の会食研究の一部に位置づけています。また史料調査の一環として、他研究室、他大学の博士課程に所属する若手研究者と共に教会史料勉強会を行い、ヨアンネス・カッシアヌスの著作 *De Institutis Coenobiorum* の、暴食と断食について扱う第 5 巻の訳文作成を進めてもいます。

最近では上記の研究を行う中で史料にたびたび登場する「死者との饗宴」にも関心があり、アウグスティヌスの書簡や教会会議の記録を利用しながら北アフリカにおけるこの風習について調べています。おそらく民衆は殉教者崇拜と混合しながら続け、教父たちは聖餐式に同種の意味を見出してこの風習を教会の中に取り込もうとしたのだと考えています。「死者との饗宴」はやや特殊な状況での会食ではありますが、権威を持つ教会と世俗信徒による丁々発止のやりとりが確認できる場面であるためとても興味深いです。

また昨年も引き続きナバラ大学が主宰するスペイン北部の遺跡 Los Bañales の発掘プログラムに参加し、その経験については『西洋古代史研究』第 24 号に掲載されています。

博士後期課程 1 年次 藤本 俊哉

私はローマ帝政期エジプトにおける任意団体 (voluntary/private associations) について研究しています。任意団体に関する研究は 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて始まり、アリストテレスの区別に基いて、宗教団体、職業団体、葬儀団体の 3 種類に大別する分類がなされてきました。しかし、コペンハーゲン大学のガブリエルセンを中心とする研究者たちはその分類に異を唱えました。従来の任意団体の区分はその団体の名称に由来するところが大きく、その活動の実態は多岐に及んでいるということを示したのです。また、彼らの研究グループは、古代地中海世界 (主にギリシア語圏) に存在していた任意団体を網羅的に蒐集するコペンハーゲン・アソシエーションズ・プロジェクトを行い、その成果をインヴェントリー・オブ・エンシエント・アソシエーションズ (CAPIInv.) というオンラインデータベースに公開しています。

修士論文では、こうした背景をもとに、ローマ帝政期エジプトに存在していた任意団体と地域共同体の関係について、CAPIInv. を活用して網羅的な研究に取り組みました。ローマ帝政期エジプトの任意団体の様相は地中海世界の他の地域とは違った特徴を有しています。任意団体が残した史料として、主に碑文とパピルスが伝わっているのですが、

その史料の性質の違いによって、特徴の差が表れているのです。碑文史料は、奉献碑文や顕彰碑文など、宗教的な行事や大きな催しの際に建立されるものが多いのですが、対してパピルス史料は日常生活の記録が記されています。そのため、特にエジプトの任意団体からは当時の実生活における任意団体の活動を様々よみとることができるのです。

今後は、ローマ帝政期エジプトの任意団体に関する理解を深めつつ、多角的な視点から深堀をしていこうと考えています。修士論文の時点では地域共同体や任意団体といった定義が少し曖昧であり、そもそも両者は古代地中海世界でどういった存在であったのかということを改めて見つめなおし、新たな視点を取り入れて任意団体の当時の実態を描出していきたいです。

修士課程 2 年次 熊谷 光里

私はフランス革命期から公認宗教体制制定期におけるフランスの宗教観や宗教実践の変化を研究しています。フランス革命は唯一の公定宗教だったカトリックの地位を揺るがし、特権的な教会への不満や宗教全般への前時代的だというまなざしが迫害を促しました。一方、同時期にはヴァンデ戦争に代表されるように宗教を擁護する運動が多発し、新たな宗教も生まれました。これを受けてナポレオンはローマ教皇と政教協約を結びカトリック信徒の支持を集めようとした。しかし彼の方針は、プロテスタントやユダヤ教もカトリックと同様に認め宗教多元性を目指した点で革命前と大きく異なっていました。

このように宗教の扱いが幾度も転換していく状況を人々はどのように受け止めていたのでしょうか。かつてはカトリック信徒に関する研究が多く、農民たちを中心に一般信徒がイデオロギーよりモラル秩序の維持を軸に行動したことが主張されてきました。しかし、近年研究の幅が国外逃亡者やプロテスタントまで広がりを見せ、宗派ごとの信仰形態や革命前の事情に起因した受容の差異や柔軟性が示されています。

また、これらの研究は近年の「世俗化論」の新たな展開に関連すると考えています。ウェーバーの脱魔術化論などから始まった「世俗化論」は、宗教の衰退ではなく変化を語る潮流に変化し、近年では個人化と多元化を特徴とする現代宗教の行方が論じられています。自身の最たる関心である「信仰とは何か」という命題に近づくためにも、現代と革命期の宗教多元性を比較しつつ学んでいきたいです。

今後はスタール夫人という貴族女性の書簡集を中心に、彼女の思想を読み解いていく予定です。彼女は革命を生きナポレオンと対立したサロニエールであり、多くの著作を遺しています。プロテスタ

ントの女性である点も興味深く、卒論で扱ったカトリックの貴族女性とも対比し、当時の宗教観を探っていきます。

修士課程2年次 田中 のえ

私は学部時代から、1世紀のローマにおける帝国の中核とその支配領域との結びつきに関心を持って勉強しています。昨年度の院生紹介でも書いたように、2023年秋から約1年、ハイデルベルク大学に交換留学をしました。日本とドイツには似ている点が多いと言われますが、学び方や人付き合いのあり方には多くの違いがあり、時折カルチャーショックを受けつつも、素晴らしい人々と出会い、自分を客観視する機会となりました。留学の後半には、ポンペイやアウシュヴィッツなど、歴史を学ぶ者として必ず訪れたいと思っていた場所を巡ることもできました。また、夏には藤井先生の紹介で Rachele Dubbini 先生が主催する Appia Antica 39 の発掘調査に参加し、考古学を学ぶ同世代の学生たちと共に汗を流しながら、古代世界に浸る貴重な経験をしました。帰国後、思いのほか留学生活に馴染んでいたためか、リハビリ期間が必要でしたが、最近ようやく京都での生活にも慣れてきたところです。

さて、研究内容についてですが、留学中には卒業論文のテーマをさらに深める形で、ローマ帝国北西辺境における軍の補給政策について研究を進めていました。しかし、修士論文では大きくテーマを変え、プリニウスの『博物誌』を用い、辺境ではなく帝国の中核に視点を置いて研究を進めていきます。プリニウスは、『博物誌』を皇帝への献上を目的とした、帝国支配域の多様な産物や知識を伝える実用書と位置づけています。その中で彼は、帝国拡大と経済的恩恵を肯定しつつも、繁栄による贅沢や知識探求の衰退を批判し、技術革新には否定的でありながらも、水道など高度な技術を要するインフラは高く評価する、という非常に曖昧な立場を取っています。私は、プリニウスのその曖昧さに着目し、帝国支配域とローマを結ぶ道路網や水道といったインフラに対する認識の分析を通じて、当時のローマ人が世界の結びつきをどのように理解していたのかを明らかにしたいと考えています。

修士課程2年次 肥後 尚恕

香水産業が現在の形態へと変化していく過渡期として第二帝政から第三共和政の時代に注目し、香水のポスターをテーマに感覚史研究を行っており、ポスターという視覚的手段によって香水という嗅覚的商品がどのように宣伝されたのかを研究し、複数の感覚や価格層にまたがる越境的ブランディング戦略を考察しました。現在は魅力や価値

の基準となる「表象」こそが視覚と嗅覚の結節点であると考え、その関連性に注目しています。

A・コルバンらによる先行研究では、香水の価格を正当化するブランディングの論法が論証されており、これまでの研究でも、その論理がポスターにおいても確認されることが明らかになりました。現時点での問題としては、それぞれのポスターに対する個別的な言及にとどまっていること、そして広告の共時的な位置付けが欠落していることが挙げられます。

今後の計画としては、ある程度分野を絞るという意味も含め、一度広告を離れて香水、香料業界を対象にした雑誌である *Parfumerie moderne : revue scientifique et de défense professionnelle* の記述や画像表象を参考に、当時の香水販売業者側の価値観について再構成したいと考えています。

修士課程2年次 松本 陸斗

私は、サッチャー政権期のイギリスにおけるシングルマザーの生活及び彼女らへの支援について研究しています。イギリス初の女性首相マーガレット・サッチャーが首相を務めた時代（1979-1990年）はしばしば、「20世紀で最もシングルマザーが政府から非難された時代」と指摘されています。実際、彼女はシングルマザーを「無責任かつ生活保護に頼り切った怠け者」と評し、彼女の推進した新自由主義的諸改革は、当時増加しつつあったシングルマザーに大きな打撃を与えました。これまでの研究者らもまた、統計的研究や制度研究を通して、当時のシングルマザーたちの窮状についてたびたび言及しています。しかし、史料を用いたシングルマザーの生活実態の検討は未だ十分になされておらず、先行研究の多くが、彼女らを「犠牲者」として描こうとするがゆえに、彼女らの「エージェンシー（制約された条件のもとで行使される能動性）」は背景に退いているといつてよいでしょう。

以上を踏まえ、私は、ひとり親支援団体「全国ひとり親協会（OPF）」に着目し、サッチャー政権下のシングルマザーの姿に迫りたいと考えています。同団体の出版物は、支援活動の内容に加え、シングルマザーたちからの投書、すなわち彼女らの「声」を掲載しており、史料として極めて有用です。それらによれば、サッチャー政権による諸改革に伴って窮状に陥ったシングルマザーたちは、同政権に対する抗議運動を展開したり、OPFの提供する職業訓練講座に参加したりしました。当然のことではありますが、彼女らは、生活に苦しむ「犠牲者」でありながらも、なんとかこの時代を生き抜こうとする「エージェント」でもあったということです。サッチャー時代、シングルマザーたちはどのような困難に直面し、いかなる戦略を駆使してそれらに立ち向かおうとしたのか。修士論文では、OPFの

活動を切り口に、この問いを明らかにしたいと考えています。

修士課程 1 年次 久保 凜太郎

自身の関心は、古代におけるイベリア半島の社会や支配構造にあります。イベリア半島は前 2 世紀にローマの支配体制へと組み込まれ、5 世紀にはゲルマン人勢力の侵入を経験し、教科書的理解に従えば西ゴート王国が栄え、やがてはイスラム勢力に取り込まれることとなりました。イベリア半島の歴史に注目すると、支配者のアイデンティティやイデオロギーの変遷が目まぐるしいことに気づきます。現代に目を向ければ、1970 年代前半までスペイン・ポルトガル両国は独裁政権が存在しており、カタルーニャ州やバスク州の自治独立運動は今も続いています。近年であれば 2010 年代のカタルーニャ独立運動が最も激しかったことは記憶に新しいと思います。時代をさかのぼれば、レコンキスタによってイスラム世界からキリスト教世界への転換も経験しています。

先ほどカタルーニャ独立運動を取り上げましたが、このような抵抗運動の象徴として、特にポルトガル独裁政権時代（エスタド・ノヴォ時代）に重要視されたのがウィリアムスでした。彼はローマが半島へ進出して数十年後に起きたルシタニア（現在のポルトガルと地理的にほぼ一致する地域）戦争の指導者であり、ルシタニアの英雄として描かれます。

卒業論文において、私はイベリア半島北西ガリシア州を拠点として建国された初期スエビ王国（411-456）を扱い、その支配がどのようにして正統化されたのか当時の司教が遺した年代記と、王国の貨幣を用いて考察しました。初期王国はルシタニアへと拡大し、その中心都市メリダは初期王国末期の王の拠点となっていたと考えられます。

そこで、大学院ではルシタニアの英雄であるウィリアムスの存在はどのように記憶されたのか、スエビ王国や西ゴート王国の支配下でどのように受け取られていたのかを研究する心づもりです。彼に関する記憶の形成が、ルシタニアという地域にどのように影響したのかを明らかにできるよう努めます。

修士課程 1 年次 周 華希

学部時代は古典語・古典文学を中心とする西洋古典学を専攻し、キケロの著作に特に関心を持っていました。卒業論文では、動名詞（gerund）・動名形容詞（gerundive）の用法に着目し、それがキケロの文体構成、議論の展開、および彼のローマ・ヘレニズム哲学体系においていかに機能しているかを考察しました。また、セネカのストア哲学や、タキ

トゥス、トゥキディデスの歴史叙述にも強い興味を抱いていました。

文献学と並行して言語学にも取り組み、生成文法（特に Minimalist Syntax）や機能文法（Functional Grammar）など多様な理論を試しました。加えて、ヤーコブソン（Roman Jakobson）の文体論を用いたラテン語のテキスト分析、また印欧諸語の比較を通じて言語類型論にも接近しました。中でも、最古の印欧語であるヒッタイト語を扱うヒッタイト学に魅力を感じました。この分野では考古学や歴史学が言語再構築に深く関与しており、学際性が顕著です。

3 年次にはギリシアへ短期留学し、宗教空間や碑文を通じて方言の変異を観察しました。続いてローマでのアメリカ・アカデミーで古代ローマの記念碑性と帝国意識に関する現地調査を行い、文献と遺構を往還的に捉える視点を得ました。こうした他分野への挑戦や旅の経験を通じて、ラテン語作家たちが創作・思索を行った社会・文化的背景を包括的に理解するためには、物質文化への理解が不可欠であると認識しました。現在は西洋史研究に軸足を移し、古典古代期の地中海世界に対する包括的理解を目指すと同時に、後期古代を越えて中世を含むヨーロッパ史の長期的展開にも関心を広げています。将来的には、伝統的な文献学的分析と、物質文化および歴史研究における最新の成果とを有機的に結びつける、学際的な視座を確立したいと考えています。

修士課程 1 年次 土居 英樹

私の研究分野はビザンツ史で、特に「文学ジャンル」に分類される史料全般に関心を寄せています。

近年ビザンツ史では叙述史料（同時代史や年代記）を「文学作品」と見なし、それらがなぜ書かれ、どう読まれたかを検討することで史料的位置付けを再考する研究が増えており、この手法は他の史料にも応用できると考えられます。具体的には聖人の生涯を描き賞賛する聖者文学と、世界終末や死後世界を描く黙示文学です。これらは伝統的な霊性や終末論などのテーマで、または社会史の情報源として扱われてきましたが、聖性の証明や終末論の提示ではない異なる目的で書かれたジャンルに捉われないテキストもあるのではないかと。この問題意識のもと卒業論文に取り組みました。

すなわち、10 世紀首都で書かれた聖者文学と黙示文学の複合テキストに注目し、その代表的事例『新バシレイオス伝』の史料的位置付けを再考しました。まず写本の大半が編集され、成立期と後世の内容が大きな変化することに注目しました。この時代・地域ごとに内容が変わる「テキストの生態」を捉える概念が「リビング・テキスト」です。この観点から内容の変化を各時代の背景と合わせて分析することで「テキストの生態」の提示を試みまし

た。結果、成立期にはマケドニア朝の祖バシレイオス 1 世の架空の聖人としての生涯と死後世界の皇帝宮殿での暮らしの描写によって彼の先帝暗殺罪を浄化させ、マケドニア朝の正当性を伝える首都宮廷の政治的文書だったことが明らかになりました。後世では政治的要素が削除された、死後救済に必要な事柄を説く教化文学に変化したという見通しも得られました。後世の内容こそ終末論の枠組みで捉えるべきものだったのです。

今後は上記の成果を『バシレイオス 1 世伝』など他の史料と合わせて吟味することで、文書編纂が盛んに行われたマケドニア朝における多様な文書の政治利用（皇帝称賛など）を探っていきたいです。

修士課程 1 年次 三坂 巧

17 世紀のボヘミア王国における宗派の変容やその変容に巻き込まれた人々について関心があります。ボヘミア王国では、15 世紀後半以来、多宗派が共存する状況が続いており、特に 1609 年の「ルドルフ 2 世の勅書」によって大きな宗教的自由が認められました。しかし、1618 年に始まるハプスブルク家への反乱が鎮圧されると、ハプスブルク家による上からの再カトリック化が強行され、プロテスタントはカトリックへの改宗か王国外への移住かのいずれかを強いられました。

卒論では、ここで王国外への移住を選択し、ボヘミア王国に隣接するザクセンの一都市であるピルナに居住した人々に争点を当てました。特に、彼らがピルナへの移住後に他のプロテスタント都市やひいてはボヘミア王国へと再度移住したことに着目し、その再移住先や再移住した個々人について考察することで、ヨーロッパ全体に広まる移民ネットワークの一部として、ボヘミアからピルナへの移住を位置づけました。

修士課程では、卒論と同じく王国外への移住を選択した人々に着目し、研究を進める予定です。プロテスタント移民の中には多くの知識人が含まれており、移住先での経験を読み解くことができます。具体的には、ピルナへと移住したヴァーツラフ・ノシドロや、同じくピルナへ移住したパヴェル・ストラーンスキー、ポーランドのレシュノへ移住したヤン・アモス・コメンスキーが書き残した著作に着目し、移民の経験やボヘミア王国への国家

観を明らかにして、移住先でもアイデンティティを保持した人々の有り様を明らかにしたいと考えています。今年度は、ヴァーツラフ・ノシドロの日記に着目し、移住先での宗派对立や宗教的なアイデンティティについて解明したいと考えています。

修士課程 1 年次 南田 和香

私は、キリスト教の海外宣教、なかでも 19 世紀後半から 20 世紀前半の中国におけるプロテスタント宣教に関心があります。

プロテスタント海外宣教はトランスナショナルな運動であり、宣教の現場では多様な国・階級の出身者が共存・併存していました。特に、外国によって植民地化されることのなかった中国には、英米系のプロテスタント宣教協会や、仏系のカトリック宣教協会など、様々な宣教協会が進出し、積極的に宣教を行いました。しかし、専ら各国史や個別の宣教協会の歴史の枠組みで海外宣教を論じてきた従来の研究は、トランスナショナルリティに焦点を当てるものがほとんどありませんでした。したがって、宣教協会や宣教師の協力・競合関係は後景に退いてきました。

卒業論文では、このような先行研究が軽視してきたような事例をとりあげました。具体的には、前世紀転換期の中国におけるノルウェー人女性宣教師と中国人改宗者の異人種間結婚をめぐる議論を分析することで、帝国主義と海外宣教との関わりを追究しました。その際には、結婚に関わった人々や議論の参加者の多様性（ナショナルリティ、ジェンダー、出身階級、所属する宣教協会など）に注目しました。その結果、少なくとも当時の中国においては、大多数の白人にとって人種主義と海外宣教は両立し得るものでしたが、一部の改宗者はこれらの矛盾に気づいており、白人の中にも、少数ではあるものの彼らに同意する者が現れ始めたことが明らかになりました。

卒業論文では、主にイギリス帝国史系の先行研究に依拠していたため、イギリス史の枠組みから脱しきることができませんでした。今後は、他の視点も取り入れることで、多角的に考察を深める必要があります。そのために、カトリック宣教に関わるものも含めて、幅広く先行研究や史料を見ていきたいと考えています。